有島安子『松むし』論
71首の短歌の分析・考察を中心に(その二)

片　山　礼　子

目　次

はじめに
(一) 言葉・表現の異同
(二)「われ」が詠まれた短歌
(三) ―色彩―「白」・「紫」・「紅」
(四)『実験室』と『松むし』
おわりに

はじめに

前号60号では、有島安子『松むし』論71首の短歌の分析・考察を中心に(その一)において足助素一宛て書簡―安子の短歌七首、吹田順助宛て書簡―安子の短歌十首、他に有島武郎の代表作『或る女』に関わって有島安子『松むし』所収の短歌についてふれてきた。

その中で、先にあげた短歌と『松むし』に所収されている短歌との間に、言葉、表現に違いが認められた。そこで、本論は、(一)そうした短歌に表れた言葉・表現の異同についての検討、私論を述べたい。(二)では、「われ」が詠まれた短歌について・(三)「色彩」―白・紅・紫―、「夢」に関わっての短歌の考察。そして、こうした一連の短歌を通じて、最後に『実験室』と『松むし』についての考察をさらに深めたい。

(一) 言葉・表現の異同

1　白百合に似たる子なればその胸に露やおくらむ母やみてより

ここにあげた短歌は『松むし』所収の歌である。この短歌は足助素一宛て書簡の中で、有島武郎が、安子の歌を提示した短歌と言葉・表現に差異が認められる。その違いは傍点の箇所である。例えば、「白百合の如き子」は『松むし』では「白百合に似たる子」と表現されている。また、「其胸」は、「その胸」に「置くらむ」は「おくらむ」と表記においてもその違いが確認できる。そこで、こうした異同から意味上、どのような変化が起こり得るのだろうか。　(傍点は引用者)

２　微笑と涙の外に言葉なき小さき心の母恋うらしも

１で示した短歌のごとく、この歌にも同様なことがいえるのではなかろうか。「微笑」が「ほゝゑみ」と表記上に変化がある。それだけでも、読者が受け止める短歌の印象が違ってくる。また、結句の「母恋うらしも」が「母恋ふるかも」と表現に違いが認められるが、後者のほうがより短歌のリズムに溶け合って、読者にやわらぎを与えている。

３　水銀が柳の枝をつぎ〳〵に伝い行くような春雨の昼

この短歌では四句の「伝い行くような」の箇所が『松むし』では「走り行くような」と表現に違いが認められる。ここでも時間的経過が十分感じられるのである。

４　生も死も人のこの世の戯れと思い入るまで思い入りぬる

この短歌は、有島武郎が吹田順助に宛てた書簡の中で紹介された歌である。時期は大正四年八月のことで、安子が亡くなる九カ月前のことである。表現の異同としては結句の「思い入りぬる」が「思ひ入りにし」に変わっている。

５　春追いて乙女心は旅に出て帰らねばこそ我は老いぬる

この短歌は『松むし』では「春追いて乙女心は旅にいで帰らねばこそわれはふけぬる」と表現されている。

ここでは「出て」よりも「いで」のほうがなめらかである。他にも「老いぬる」よりも「ふけぬる」からはさまざまな状況がイメージ化しやすい。

こうしてみると、『松むし』に所収されている短歌の方が、言葉やリズムに広がりが感じられる。そのことは、４の短歌にもいえる。「思い入りぬる」よりも「思ひ入りにし」の方がより、読み手に対して繊細な感情を伝えることができるのではないか。

６　砂漠行く人の如くにわが心今日も渇きてさすらえるかな

この短歌は『松むし』では、「砂漠」が「沙漠」と表記の違いがみられる。

7　我が心朝の寝床に流れ入る秋風の如今朝は冷し

この歌は『松むし』では「わが心めざめし閨にながれ入る秋風のごと今朝はつめたし」と詠まれ、「朝の寝床」の箇所が「めざまし閨にながれ入る」と表記が変化している。

8　かくて我れいつまであらんはかなしと思う夜などの人の恋しき

ここでは、「恋しき」が「恋しさ」と体言止めになっている箇所に注目したい。こうすることにより、結句の意味が強まるだろう。

9　あわれなり瓶にさしたる秋の花枯れても散らず執着の如

この歌の表記の違いは「さしたる」が「活けたる」に変化していることである。

10　臥しながら又栗喰居れば野を分けて秋の風行く何処に行くや

「臥しながら」が「ねながらに」になっている。
9の歌、同様に病室での様子が連想される。

11　我兒等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまだゝきもせず

「我兒等に」が「わが子等に」なっている。

このように、有島武郎が日記や書簡で示した短歌と『松むし』所収の安子の短歌と見比べてみると、言葉や表現に少なからず違いが認められる。このことは何を意味しているのか。これまで、安子の詠む短歌のモチーフは、「生」・「死」に関わってのものが多かった。闘病中の様子は『病床雑記』からも窺がれる。安子の心のつぶやき、内面の吐露が充分伝わる。「生」、「死」にかかわり、その思いは71首の短歌の中に託されている。安子の死後から一ヵ月後、有島武郎は、父の別荘「浄月庵」に滞在し、軽井沢で『松むし』をまとめている。以下、『松むし』71首に関わって、その他「我」・「色彩」・特に、―白・紫・紅―、「夢」をモチーフに詠みあげた短歌の考察を深めたい。

（二）「われ」が詠まれた短歌

有島安子の短歌の中に「われ」の言葉を多く見つけ出すことができる。例をあげると次に示す短歌である。

12　わが心花につゝみて君がため育てし春のなつかしきかな

13　君故にわれほゝえまず物いわず二八乙女のむくろとなりぬ

14　夢の国国の浦曲の夕月夜恋してぞわがさまよい見たる

15　君か子かいずれを先に抱くべきわがこのごろの弱気心は

16　君にゆくわれの心ぞねたましき酔いて帰るも泣きてかえるも

17　花にさえ恋はあるをとわが背恋う若き人妻われにかたりき

18　恋と云い思てうものなき世にはわれ安からめ苦しからまし

19　かくてわれいつまであらんはかなしと思う夜などの人の恋しさ

20　君云わずわれも黙しておのがしゞ思い出川に棹さしてゆく

21　黄金虫霜夜に逝くぬこれぞわが小さき妹の小さきかなしみ

22　わが胸におさなき子等は日毎来てとく癒えませと涙していう

23　わっとなくおさなき声をわが子かと夢よりさめてふと見まわしぬ

24　わが子等に似たれどかなし人形のつぶらなる眼はまだゝきもせず

25　恋ならぬわがものおもい母という小百合のごとき高き名故に

26　神かけて子等思わじと病むわれの誓いし日より世は変わり見ゆ

27　人ふたり住むかとぞ思うわが胸のこゝろの宮にあらそい絶えず

28　呼べどたゞ夢のみ残りわが春はとわにゆきけむ行方知らずも

29　神と魔の心に住めばキリストの悲しみさえもわれは知らでや

30　春追いて乙女心は旅にいで帰らねばこそわれはふけぬる

31　沙漠ゆく人の如くにわが心けうもかわきてさすらえるかな

32　わが心めざめし閨にながれ入る秋風のごと今朝はつめたし

33　女とは実にもすだまのなれる果てわれうとましき日もまじるかな

34　幸なれや恋故子故病故三たびわが世のかわりぬること

35　蟻のひく餌ともならじおぼつかなすえもはてたるわれの心は

36　おそろしや心の底に女の魔ひめて我をば我はあざむく

37　うつろなる人形芝居の人形となるにはわれのすこしかしこき

38　死ぬと云う事さえ敢てふりむかず眠りてありや小さきわが魂

39　夢にだに見もせですぎし恐ろしの国に住えりわれ病みてより

40　わが罪はかくも深きや熱と魔は夏の真昼のわが肉を喰む

41　たらちねを手がせ足がせ鞭つに似たらずやわれ不幸なる子よ

42　召し給う星のまたゝく遠方にいざ我ゆかむ人とわかれて

（番号は引用者）

「われ」を詠みあげた短歌、「わが」にまで言葉の範囲を広げると71首中、31例と相当の数に及んでいる。『松むし』は、安子の死後有島武郎がまとめ、大正五年九月二十三日に四百部限定発行している。この中に71首の短歌が所収されている。また、『松むし』の記銘は、有島安子が、生前「松むし草」を非常に好んでいたことに由来している。表紙の揮毫は武郎の父、武によるもので、「松むし」を完成するにあたり、武郎は軽井沢「浄月庵」に滞在していることも明らかである。当時の状況については、武郎の日記や書簡に詳しい。

他に、是非ともここでふれておかなければならない事柄として、有島武郎の短歌や俳句、詩についてである。もちろん、有島武郎が、安子に短歌を詠むように勧めたのも事実である。また、武郎自身がこうした詩歌に造詣深かったことも認識しなければならない。そのことは、軽井沢で、武郎が一茶や蕪村の俳句を『信濃日記』に記していることにも注目してよい(注一)。そして、もう一点、有島武郎自身が同時代の文士たちからの影響は言うに及ばず、与謝野鉄寛の『明星』をはじめとする与謝野晶子の数々の短歌からも刺激を受けたであろう。特に、有島武郎は与謝野晶子と同世代である。安子が亡くなり、大正五年を境に大正十年頃はさらにその交友も深まっている。また、明治三十四年に発表された『みだれ髪』には「白百合」・「春」・「神」などをキーワードとした短歌が詠まれている。このことは、「松むし」の中でも明らかに、『みだれ髪』を意識していると思われる短歌「わが髪はみだれもつれぬ君をひく力のありや病みての今も」など、双方に共通した言葉に出会う。『みだれ髪』には「むらさき」をイメージし、色彩を基調にし詠みあげた短歌があるが、『松むし』においても、この色彩―「白」・「紫」・「紅」－を詠みあげた短歌の数が多いことに気がつく。「むらさき」は与謝野鉄寛とも非常に関係がある。また、有島武郎の日記・書簡から、色彩に関連して「白」や「青」について記した箇所や、武郎が詠んだ短歌の中に、色彩のあでやかさを読者に引きつけている詩歌を見出すことができるのである。

このことは、『実験室』や『死と其の前後』とも関係し、「信濃日記」をはじめ、大正６年に発表された戯曲『実験室』からも「松むし」と有島武郎の作品とのかかわりについて関連してくる。特に、『或る女』後篇を完成するにあたってその影響に関して無関心ではいられない。

（三）―色彩―　「白」・「紫」・「紅」

「松むし」所収の短歌に詠まれた言葉に注目をしてみると、「われ」の他に、「白」・「紫」・「紅」など色彩をイメージした短歌が多いことに気がつく。当時、病床中の安子が、そうした一連の短歌を詠んでいたという事実はゆがめられない。そうした安子が詠みあげた短歌の例をあげてみよう。

43　紫の夜よりさめて、世はしばしあさの化粧のうつくしきかな

44　むかし見しはかなき夢の行方にも似しあはれなり朝顔の花

45　夏祭り村の乙女等のうちつどい遊ぶがごとく紅野ばら咲く

46　舟出する海土に幸あれ紫の国より生るゝ日はいま出で来

47　秋は来ぬ山の木の実に野の花に夕べの雲のさびしき色に

48　紫の飛白の甲斐絹しろうらの夜着きて春をやむ乙女かな

こうして、『松むし』では色彩をイメージさせる短歌にであう。それも「白」・「紫」・「紅」などの色調のものが多く詠まれていることも特徴の一つとしてあげられよう。もちろん有島武郎自身が絵を描いていた事実、武郎が病床期の安子に対して、葉書に武郎自らの短歌からも色彩への思い入れの強い歌にふれることができる。また、武郎が日記のなかで、白や青に対して、様々に表現ができるのではないかと記している。こうした記述はなぜか、有島武郎の作品『二つの道』(明治43年４月『白樺』所収)「二つの道がある。一つは赤く、一つは青い」を髣髴させる。

ここに、有島武郎の生涯の一端を思わせるものがある。有島安子『松むし』所収の短歌には、この他にも、「夢」・「うつつ」の境の中で詠んだと思われる短歌にであう。
少し、こうした例をあげてみよう。

49　うつら〇おぼろ夜の国夢ざかいまよい入りつゝおさなごの笑む

50　わっと泣くおさなき声をわが子かと夢よりさめてふと見まわしぬ

51　呼べどたゞ夢のみ残りわが春はとわにゆきけむ行方知らずも

52　人妻は何かなしむや春来れば昔の春の夢か心か

53　夢にだに見もせですぎし恐ろしの国に住えりわれ病みてより

（番号は引用者）

ここで、『松むし』所収の短歌から、さまざまな事柄が派生していくが、その中でも是非とも明らかにしなければならないことは、『松むし』の一連の短歌が有島武郎の作品にどのように関わっているのかという点である。このことに関しては前号でもふれた。少なくとも『松むし』は『或る女』を完成するにあたって影響があると言ってよいだろう。

つまり、『実験室』や戯曲『死と其の前後』との関わりである。

（四）『実験室』と『松むし』

『実験室』は安子が亡くなった翌年、大正六年（中央公論）に発表された作品である。主人公、三谷Ｙ子は二十歳、八月一日、午後七時・乾酪性肺炎で亡くなる。この作品は、戯曲『死と其の前後』とほぼ同時期に完成されたものである。

内容は、妻の手術執刀のために、その場に立ち合う夫の内面が描かれている。つまり、『或る女』での葉子の人物像への影響もあげられる。そうした描写に注目をしてみると、「妻の死霊に乗り移られた不思議な野獣が、牙をむいて逼りかゝって来たように思われた」また、「妻の断末魔の光景が、彼の考えていた学術の権威、学徒の威厳、男の沈着、その他すべての障碍物を爆弾のようにたゝき破って、いきなり彼の胸にまざゝと思い浮かべられたからだ」と、手術のためにメスを手にする人間の内面、状況が描かれている。戯曲『死と其の前後』とも関わり、『実験室』においての場面や描写は、『松むし』での場面と相重なる箇所を見出せるのである。もちろん、『実験室』も『松むし』も有島武郎は軽井沢で執筆している点でも双方共通している。

丁度夏の夜が早くも専門になろうとする頃、熱の為に浮かされて譫言を云いながらもうと⌒と眠っていたＹ子は、突然はっきり眼をあいて床の上に起き上った。

「気がちがいそうに頭が痛みます。私の脳は破裂するんじゃないでしょうか。私はもっと生きていたいんですから、先生どうか助けて下さい。殺さないでください。どうか

あゝ痛い⌒…死ぬのはいやです…私は死にたくないんです」

こうして、死に直面しているヒロインＹ子の様子、描写は逼迫した状況と向きあっている。こうした場面で、夫は妻に対して「六年間彼は心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかったのだ」と自分自身を回想していく。

このような場面は、病魔と闘う安子、そして妻を看病する武郎の姿が思い浮かぶ。

一連のこのような状況から、ヒロインの最期は真に逼る迫力がある。

六年間彼は、心の底のこの不平にやさしい耳を傾けてはやらなかったのだ。
深い絶望に沈んだ彼はすがるような心になってその瓶を四つとも取り上げて自分の額にあてた。
妻が死んでから今まで彼の強い意志でせきとめていた涙が、燃えるあように盲いた眼からもはら〜と流れ落ちた。　(一九一七年八月十九日　軽井沢に於て)—『実験室』—

ここからも、明らかに『松むし』との関連を見出すことができる。こうした場面は『或る女』のヒロイン・葉子とも相重なる。特に、後半部では、葉子の精神が次第に蝕まれていく。それは正気とはいい難く、むしろ狂気を帯びた彼女の様相が窺われる。しかも、読者は、武郎自身が葉子に乗り移ったような描写にであう。

妻を失った悲しみ、そして、亡き妻への悔恨の念も明確に描写されている。つまり、安子の闘病生活を通じて、武郎の中に新たな視点が加わったものといえよう。このことは、『実験室』と同じ時期に発表された『死と其の前後』の戯曲からも当時の武郎の様子を知ることができる。四場の描写の中で「死がしのびやかに近づいて参ります。私にはそのひゞきを聞くことが出来ます」という妻の言葉、この表現は『松むし』の中で同じように使われている。

安子の死後、武郎は安子の日記を書き写している。また、秋の軽井沢で松むし草を直接眼にしている。もう一点、『或る女』に関して、完成時期であるが、予定では大正七年と『実験室』が発表された翌年のことであったが、実際に『或る女』が完成したのは大正八年のことである。

以上のことから、『或る女』後篇の執筆にあたって、武郎の中では病魔と闘う安子の面影がおのずと投影されているのではないかと考える。否、むしろその影響があったと解釈したほうが自然ではないか。

おわりに

前号、続いて今号と有島安子『松むし』所収の短歌71首を中心に、『松むし』の考察を加えてきた。その中で、こうした一連の短歌に向き合う中で、『松むし』が有島武郎の作品に影響を及ぼしているという点である。特に『或る女』後篇への関連である。それは、安子が闘病中に書き記した『病床雑記』、また、その中で詠まれた短歌は有島武郎の作品との関わりにおいて切り離すことができない。そのことは、当時の武郎の日記や書簡からより明確になってくる。

安子が亡くなり、有島武郎が『松むし』をまとめるにあたって、その冒頭で、武郎は安子につい

て、次のように述べている。

故有島安子は神尾光臣の第二女にして明治二十二年六月十七日東京本郷区に生れ、軍職にある父に従いて少時地方に出でゝ諸所に転住し、後東京に移り住みて東京女学館に学び、明治三十九年卒業して更らに同館専修科に入りしが、在学中明治四十二年三月余に嫁して北海道札幌なる余が任地に赴き、六年間険悪なる北邊の気候と戦い、知己少なき境遇に処して専心家政の事に従い他を顧みず、健康亦且まるゝ所なかりしが、大正三年九月突如肋膜肺炎に犯され、十一月医師の勧誘に従い家を挙げて東京に帰り、爾後鎌倉平塚等にありて専心静養に尽したるも病勢漸く革り、八月二日朝静かに世を去れり。行年二十有八。

さらに、武郎は

このさゝやかなる集は故人が病苦の間に書き残したる断簡の殆んど凡てにして、録する所悉く私事に亘り人に示すべきものにあらざるに似たれど美醜共に蔽わず敢て上梓したり。

と記した。また、この頃の武郎の日記に「彼女を死より救いたいと思う余の望みは彼女が一の淵に近づくにつれて強くなってくる。運命よ、今一度彼女の上に慈悲の笑みをかけ給え。そして、我等、彼女の夫と子供達を昔の如く、幸福な結合に導き給え」など安子への思い、当時の武郎の内面にふれることができる。そして、『松むし』が完成する九月の武郎の日記の中に、「彼女は生と死の問題に関して強く且つ深い思想を筆にする力を与えてくれるだろう」（注二）と武郎、自ら記している。

（注一）　当時の様子は『信濃日記』に詳しい
　・吹き飛ばす石も浅間の野分かな　芭蕉
　・浅間山煙の中の若葉かな　　蕪村
　・長閑さや浅間の煙昼の月　　一茶

（注二）　一九一六年九月十四日付け日記

【付記】　本稿の引用文（短歌）の表記においては、旧漢字、旧仮名遣いを、新漢字、新仮名遣いとした。